

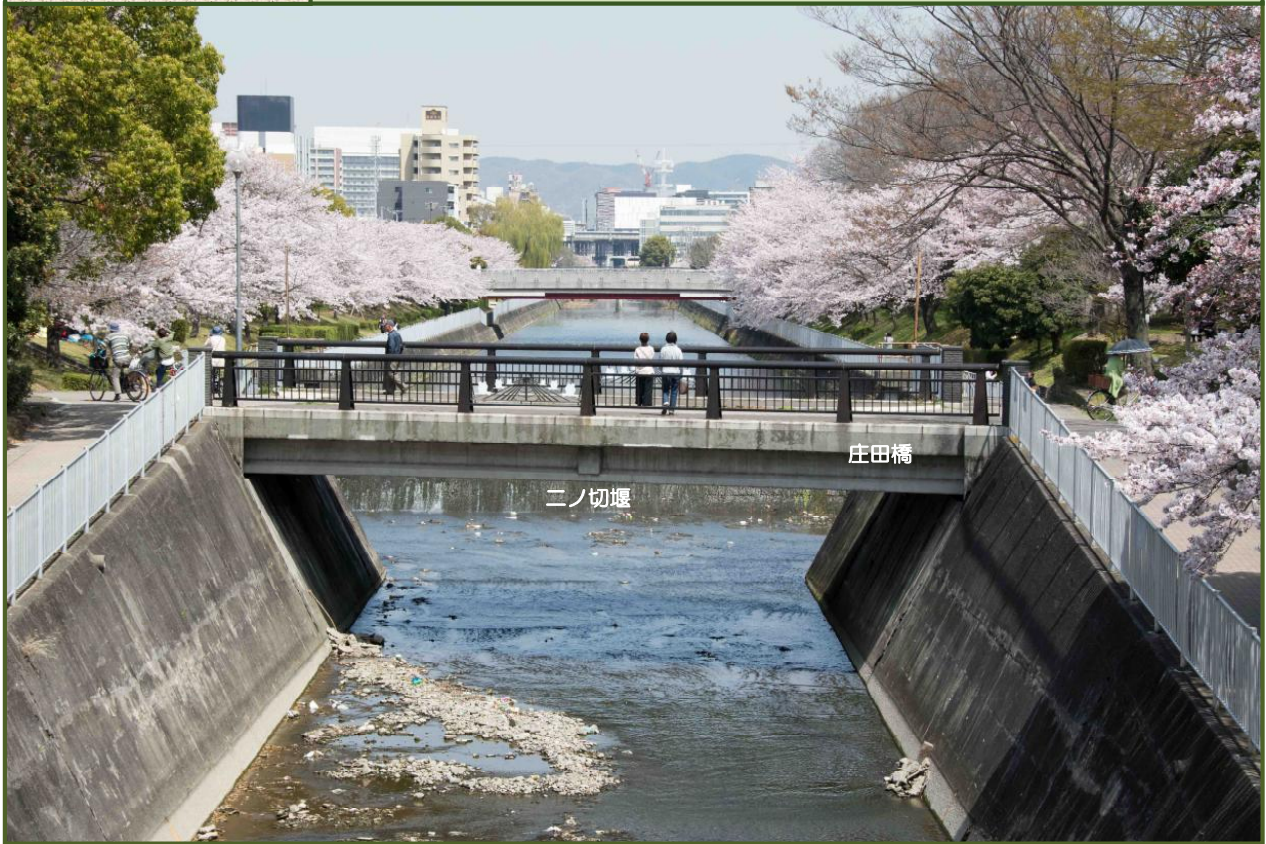


写真-1 三左衛門堀橋から外堀川上流を撮影（平成30年3月）

■ 海防と舟運を兼ねて軍船を引き入れようとしたのか、それとも高瀬舟による舟運か

三左衛門堀の開削が中止となった理由として、池田輝政死去に伴い播磨、備前、淡路の藩主が交代したことによる役夫の引き上げ、大坂の役への出兵、度重なる天下普請等に伴う財政事情の悪化が考えられますが、運河開削の目的が判然としません。

三国橋左岸にある石碑「外堀川由来書」（下記参照）にあるように、“海防と水運を兼ね”瀬戸内海を航行できる関船あるいは弁才船（べさいせん）を航行させようとしたのか、それとも高瀬舟（川舟）か。関船あるいは弁才船であれば、喫水深約 1.8m が確保できる水平式運河（外堀には接続不可）、高瀬舟であれば、喫水深 0.6m 程度を確保できる緩勾配の水路（外堀に接続する）を建設することになり、いずれの方法も課題はあるものの、当時の技術力で建設は可能と思われます。

海防と水運を兼ねた運河とした場合、平時は物流に供し、戦時はこれを防備に利用するということを考えたのでしょうか。瀬戸内海を航行する船が、直接城下近くまで入っていければ、飾磨津で高瀬舟に積み替える手間が省けます。ただ、海防に関しては、飾磨津を拡張して多くの軍船を繋いでおけばすむ話で、城下近くまで軍船を引き入れる理由は思いつきません。

由 来 書

この堀は三左衛門堀といい、慶長 5 年（1600 年）関ヶ原の戦功により播磨 52 万 1 千石の領主となり、堀を建設した池田三左衛門輝政の名に因んで名付けられた。輝政は姫路城の築城を行うと共に、姫路から飾磨津（姫路港）までの間に海防と水運を兼ね城下の経済的發展を目的として市川の旧水路を利用し開削を進めた。

しかし、工半ばにして輝政は亡くなり工事は中止された。今に残る約 2km の水面は、播磨灘に雄飛しようとした輝政の心意気がしのばれる。この三左衛門堀を昭和 49 年、二級河川外堀川に指定し、この度全面改修を行った。ここに完工を記念して後世にその由来を記す。

昭和 61 年 3 月吉日

姫路市長 戸谷松司^{※1} 書

一方、高瀬舟による舟運を開くため、と考えれば、水平式運河に比べ解決すべき課題は少ないように思います。いずれにしても、広大な領地から年貢米をはじめとして多くの物資を城下に集め、経済的發展を図ろうと考えたはずです。

現に、加古川では、秀吉の時代に高砂から滝野までの舟運が開かれていましたが、輝政は慶長 9（1604）年加古川河口の流路を切り替えるとともに高砂港を築き、さらに阿江与助や西村伝入斎に命じて滝野から本郷までの舟路開削を行っています。

これにより輝政は、加古川上流域から下ってきた物資を大坂へ運ぶことと併せて、姫路城下に運び込むことを考えたのではないのでしょうか。この場合、三左衛門堀を弁才船が航行することが可能であれば、飾磨津で弁才船から高瀬舟に積み替える手間が省けます。

※1 戸谷松司（とにまつじ）：兵庫県土木部河川課長、兵庫県土木部長などを経て昭和 51（1976）年から昭和 58（1983）年まで兵庫県副知事。その後、昭和 58（1983）年から平成 7（1995）年まで 3 期姫路市長を務めた。

■ 三左衛門堀の掘削土で向島を造成

三左衛門堀を開削した時に発生した大量の土砂の行方が気になりますが、すべてか一部かは別にして野田川河口部の埋め立てに利用され向島が造成されました。当時、向島はその名の通り島でしたが、現在は東側の水路が埋め立てられ島ではなくなっています。向島には船役所が設けられましたが今は跡形もなく、野田川に架かる向島橋を渡り、左岸沿いに約 80m 南に行った所に「史蹟旧姫路藩御船（みふな）役所※2 之址」と刻まれた石碑（昭和 10 年 5 月建立）が建っています。裏面には、「御船役所は慶長年中、姫路藩主・池田輝政公、當時の飾磨川（現・野田川）口三角州を修築し、東西七十間（≒127m）、南北九十四間（≒171m）の島を築き、高砂の水主（かこ）を此処に移し、藩の海事を取扱いし所なり」と刻まれています。



写真-2 野田川に架かる向島橋（橋の左岸側が向島）



写真-3 「史蹟 姫路藩御船役所之址」と刻まれた石碑

※2 姫路藩御船役所：御船奉行所とも呼ばれ、藩主・池田輝政が創設し、姫路藩水軍の基地として向島に設けられた。役所内には、御船作事所、小船頭矢倉詰所、勘定役詰所、目付小奉行、棟梁総大工詰所、御船道具置場、馬屋などが置かれ、御船手と呼ばれる士族が常駐し、藩の海事事務を行っていた。保有船舶は約 60 隻、御船手組の定員は 200 名で「城付き」の特例があった。

■ 放棄された三左衛門堀は、その後農業用溜池として利用されていた

工事半ばにして中止となり、そのまま放棄された三左衛門堀ですが、いつの頃からか周辺農地への農業用水に利用されていたようです。三つの堀の下流端に取水施設らしきものがあり、上流から一ノ切堀、二ノ切堀、三ノ切堀と呼ばれていました。

図-1～3 は、昭和 46（1971）年の国土基本図（1/2,500）です。地図には三左衛門堀の 3 つの堀が描かれているのですが、備前堀、播磨堀、淡州堀ではなく、北から順に、三左工門堀（備前堀）、三左工門一の池（一ノ切橋～二ノ切橋）、三左工門二の池（二ノ切橋～二ノ切堀）、三左工門四の池および三左工門五の池（二ノ切堀下流～三ノ切堀）と記されています。ただ、なぜか三の池の記載がありません。



図-1 一ノ切堰周辺の状況



図-2 二ノ切堰周辺の状況



図-3 三ノ切堰周辺の状況

■ ドブ川となっていた三左衛門堀を改修して市民の憩いの場に

姫路市では、昭和 37 (1962) 年に三左衛門堀周辺を「運河公園」として都市計画決定し、昭和 47 (1972) 年度から都市小河川改修事業※3により護岸整備や汚泥の除去などを進めました。事業は昭和 58 (1983) 年度に完了、「清流、蘇る」とまではいきませんが、昭和 50 (1975) 年前後と思われる写真-4 と比較するとよくわかりますが、下水道整備の進展と相俟って格段にきれいになりました。

なお、外堀川の下流・野田川については、昭和 47 (1972) 年度に播磨高潮対策事業に着手し、平成 12 (2000) 年度には野田川排水機場が完成し、排水ポンプも計画 3 台の内 2 台が設置されています。

※3 都市小河川改修事業：現・都市基盤河川改修事業。昭和 42 (1967) 年災害では市街地を流れる中小河川の氾濫が全国的に発生し、都市河川改修の必要性が浮き彫りになった。そこで、当時の政令市が中心となって国に要望し、昭和 45 (1970) 年度から都市小河川改修事業制度が創設された。この制度では、従来国や県が事業主体であった河川改修を市が事業主体となって実施できるようになった。



写真-4 昭和 50 年頃の三左衛門堀（姫路土木事務所提供）

■ 輝政に因んだ橋名

外堀川は、二級水系野田川の一部です。その野田川は昭和 46 (1971) 年 3 月二級河川に指定され、3 年後の昭和 49 (1974) 年 3 月に外堀川が二級河川の指定を受けています。その際、通常は野田川の上流端を延伸する方法が採られますが、わざわざ延伸部に「外堀川」という名称を付けています。大運河を開削し姫路城の外堀に繋ごうとした輝政の夢を、「外堀川」という名に残そうとしたのでしょうか。

大天守を備えた立派な城や総構えの大きな城下町に加えて、度重なる天下普請に対応するには莫大な費用がかかることから、輝政は年貢の二割打ち出しといった苛烈を極めた領国支配を行っています。加えて、大土木工事に要するきびしい夫役（労働力の徴発）もあって、領民たちは二重三重の負担に苦しめられ、輝政は領民の怨嗟的になっていたはずですが、今なぜか歴代藩主の中で輝政だけが名を残しています。

外堀川の下流端は、国道 2 号姫路バイパスの南にある三ノ切橋、上流端は JR 山陽本線の北にある巽橋です。外堀川の延長 2,663m の間には、輝政に関連した名が付けられた橋梁がいくつかあります。

① 三国橋：三左衛門堀は、備前・播磨・淡路の三国の役夫によって開削されたことから別名「三国堀」とも呼ばれていて、堀の上流端に架けられた「三国橋」の由来となっています。

② 城陽揚羽橋：池田家の家紋「丸に揚羽蝶」が親柱に貼り付けられています。(写真-9参照) また、橋の右岸には歴代城主の家紋が描かれたモニュメント(写真-8)が設置されています。

③ 三左衛門堀橋：「三左衛門堀」の名がついた橋で、姫路市役所の東に架かる橋です(写真-6)。

④ 三左衛門橋：三条橋のすぐ上流に架かる歩道橋。

⑤ 三ノ切橋：野田川と外堀川の境界は「三ノ切橋」なので、橋の親柱の銘板にどちらの河川名が書かれているのか気になって見に行くと「三左衛門堀」の銘板が。おそらく橋は、外堀川の二級河川指定以前に架けられたものと思われる。

三ノ切橋下流にある三ノ切堰は、堰下流の水位痕跡から、満潮になってもこの堰を越えないようなので、この堰は潮止の機能も併せ持っているのでしょう。

なお、堀の両側にある三左衛門堀東の町、西の町という町名にも名残がみられます。





写真-5 三国橋左岸部のモニュメント



写真-6 三左衛門堀橋



写真-7 三左衛門堀橋の親柱



写真-8 歴代藩主の家紋のモニュメント



写真-9 城陽揚羽橋の親柱（池田家の家紋：丸に揚羽蝶）



写真-10 三ノ切橋と三ノ切堰

■ モノローグ

『池田家履歴略記』四巻に「慶長十八年、国清公（輝政）遂に正月二十五日播州姫路の城に薨去（こうきょ）なり。春秋五十歳。輝政公は備・播・淡三州を統領し、神君（家康）の娘婿にて渡らせたまえば、威勢肩を比（なら）ぶ人なく、当時西国の将軍と申すほどの御事なりき。」とあるように、家康に対抗心を燃やし、西国大名に睨みを利かす「姫路宰相」と言われた輝政です。「三左衛門堀」を開削して輝政は何をしようとしていたのでしょうか。

輝政のライバルだった福島正則は、高砂港に繋いだ 100 隻の軍船の出番がないのを見て、これを阿房丸と名付けて笑いものにしたそうですが、後に大坂の役が起きると「輝政の智謀は測り難いものがあった」と言ったとか。

運河計画について筆者なりにいろいろと考えてみましたが、残念ながら対象とする船を確定することはできませんでした。



写真-11 池田輝政公
（鳥取県立美術館所蔵品）

ただ、多々課題はあるものの技術的には運河の建設は可能です。輝政がもう3年長生きしていれば、という気がしてなりません。跡を継いだ利隆が運河計画の中止を決断したかどうかはわかりませんが、少なくとも継続できる状況にはなかったようです。

いずれにせよ、運河計画の中断を“設計ミス”とするのなら、その根拠を明確に示すべきです。土木技術者にとって“設計ミス”は屈辱的な言葉で、もしミスがあったのなら切腹ものだったはず。明確な根拠がないのであれば、この運河計画は、“輝政の夢”として謎のままにしておきたいものです。

ウコンザクラ（鬱金桜）

バラ科の落葉高木。淡黄緑色の八重の桜で別名「黄桜」。4月中旬に開花するオオシマザクラ系サトザクラの園芸品種である。数百品種あるサクラの中で唯一、黄色の花を咲かせる。ショウガ科のウコンの根を染料に用いた鬱金色が名前の由来。ソメイヨシノの開花の後、4月中旬～下旬に淡黄緑色で直径約4cmの花がやや垂れ下がり咲く。伏見にある大手酒造会社「黄桜」の社名の由来は、創業者・松本治六郎がことのほか黄桜の花を好んだことから。外堀川沿いに咲いていた。（平成26年4月撮影）



写真-12 ウコンザクラ（外堀川沿いにて）

【参考資料】

- 1 『姫路市史 第十四巻 別編 姫路城』 姫路市 昭和63年7月
- 2 『野田川水系河川整備基本方針』 兵庫県 平成15年5月
- 3 『池田家三代の遺産』 播磨学研究所編 平成21年8月
- 4 『姫路城史』 橋本政次著 平成6年10月
- 5 『文化財見学シリーズ 14：飾磨津をたずねて』 姫路市教育委員会文化財課 昭和60年3月
- 5 『ウコンザクラ』 さくら私的花図鑑 HP <https://jahlove.jp/sakura/314.html>

※発刊：平成30（2018）年5月 『ひょうご水百景』 No.84

改訂：令和8（2026）年6月 『ひょうご水百景』 No.84